

## 九六 偉人の幼年少年時代

梅檀は二葉より香しといふ。優秀な智能を備へたものは、三歳既に萌芽を示し、五歳七歳にして實績を見せること、古往今來其例乏くない、しかし、これ等の早成兒は、多くは「小供で神童十五で才子二十歳過ぐれば凡人」の譬通りになるが、かうした優良兒を凡人に終らせぬやうに、相當な機關を設けて助成し、生得の天分をして愈其光彩を發揮せしめ、國家有用の材を造り上げたものである。

けれども又神童の儘で押通して、偉人となつた人々も随分ある。其中で有名な話を舉げて見ると、水戸光圀は七歳のある朝、小がうといふ老女に對つて、

降る雪が白粉ならば手にためて小がうが顔に塗りたくぞある

と詠んだ、老女の黝んだ顔が、此腕白な小公子の眼に映り、小公子は悪戯な眼で、老女を見遣つたであらう。

光圀から七代に烈公齊昭が出た、水戸には代々英主が出たが、義公烈公を以て其最とする。

烈公五歳の時庭池の畔で、父から螢の歌を詠めと言はれ

お庭の西行の目は光りけり水にうつりて螢なりけり

と、池畔の西行堂の木像の眼を、螢に見立てて詠じた。

田捨女は、雪深い丹波柏原の人、六歳のある朝

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

と雪の實景を口詠み、また十歳の時親類の酒店に遊べる際、其家の得意先から菊といへる女を  
使として、酒を一升求めに來た、恰重陽の節句であつたので、捨女は

酒一升九月九日使菊

と書記したといふ、四俳女にも五俳女にも、或は女六俳仙にも、本朝八僊集にも其一とし  
て、後世に謳はれた所以であらう。

契沖阿闍梨は、桑門に出でた國學界の大先達で、下河邊長流との交遊世周知の如くである。

五歳の時、母から百人一首を教へられ、悉く暗記してゐた、三千首の歌を暗んじたといふ記憶  
力は、これが涵養されたものである。

新井白石七歳、芝居を見物して歸つてから、其劇の話をするのに、順序が少しも違つてゐなかつたといふ、故實典故の大家の、整然たる思索は既に發程してゐた。

松永久秀は單に武將として聞えてゐるが、其子永種は、七歳東福寺に入り、僅に二十日にして法華經一部を誦した。永種の子が俳諧の祖と呼ばれた松永貞徳で、貞徳の子尺五は、十三歳の時豊臣秀頼の前で儒學を講義し、其子孫も亦學を以て鳴つた。

池大雅、三歳にして「金山」の二字を書き、七歳大字を書して大梅和尚に送つた。金山の二字書は今も儼存し、大雅研究の大家人見少華畫伯の珍藏する所となつてゐる。

松平樂翁十歳の頃より、漢詩和歌を作るに餘念なく、十七歳の頃には、既に七千首の作歌があつたといひ、彼の有名なる

心あてに見し夕顔の花散りてたづねぞわぶるたそがれの宿

の詠により、たそがれの少將と呼べるゝに至つたといふ歌は、一説に十六歳の作品であるとす。

頼山陽五歳の時、父の歸宅を村外れに迎へ、父の姿は見えすして、農民が麥を荷うて歸るのみなので、「家君不返唯麥歸」と一句を吟出した。

遠州の歌人石川依平、五歳初めて歌を詠み、七歳の時

咲ながら匂ひは浅く冬深みくれゆく垣に梅のしづけさ

と詠み、それを短冊に書いたもの、今、家藏に歸してゐる。

北村季吟の子湖春十三歳、孫湖元十一歳、何れも吟詠あり、祖父の名を辱しめない。

間長涯年十二にして、渾天圖を見て之を腦裏に入れ、數日の後自ら竹木を以て、毫も差はぬ一儀器を造り、看者をして驚嘆せしめた、曆學界の第一人者たる資格は、此時既に有つてゐたのである。

大阪の學者として聞ゆる佐々原宣明は、二歳にして字を読み或は書いた、坊間時に其墨蹟を見るが少年時代の作品に、實に堂々たる筆痕のものがあり、十歳には既に一廉の和漢學者であつた。

税所敦子六七歳の頃、蜘蛛の巢を透して月が見えたので、之を歌にして人を驚かした。

香川景恒門、中山みや子に、六歳の作、七歳の作といふ歌がある。

尾張の柳河春三は、生後二十ヶ月にして、筆を運び字を作つたといふ、三歳、藩公の前に揮毫中、多勢から注文せられ、最後に藩公の今一枚といつた時、「もういやになつた」と書き

た。四歳にして同國笠寺の額を書き、十一歳、法華經論攷の著書あり、十二歳にして西洋砲術の著述があつた。

土佐の勤皇家間崎滄浪は、四歳孝經を、六歳に四書五經を讀み、七歳には詩文を作り、同藩の細川潤次郎、岩崎馬之助と同年にて、同時三奇童と稱せられた。

龜田鵬齋は、六歳書を能くし、其子綾瀬は、十五歳にして、既に一廉の儒者として、諸生に講義をしてゐた。

松平冠山の女露女享年六歳、而して其遺詠中に「おのが身のすべを知らずに舞ふ胡蝶」といふ句がある。最晩年が六歳である、もつと若い時の作があるかも知れない。